天国遊び

野呂重雄

一ツ橋書房

野呂重雄（のろ しげお
一九三一年　沖縄県中
一九五五年　早稲田大
現在　日本教職員組
現住所　千葉県成田市

天国遊び
一九六九年十二月十日　第一刷発行
一九七〇年三月三日　第二刷発行
定価　七〇〇円
著者　野呂重雄
発行者　福本司郎
発行所　株式会社　一ツ橋書房
東京都千代田区神田小川町二の五
加藤ビル　郵便番号　一〇一
電話　東京（二九三）八三二五～六
振替　東京　三九七六八
印刷・船舶印刷　製本・三浦製本

© Printed in Japan

天国遊び

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

天国遊び　目次

非行少年……七
林間学校……三三
陸橋の上で……六三
天国遊び……一一七
火遊び……一六三
子供の捨て場所……二一一
詩人の小部屋……二六九
あとがき……三〇九

装丁　桑畑義博

非行少年

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ぼくと嘉奈子は職員室の青いガスのもえるストーブの前に坐らされて、周囲を教師達に囲まれて口々に罵られていた。するどい言葉がぼくらの柔らかい桃色の耳朶をひき裂くようにふりそそいでくるのを、ぼくらは眉をさげてきいていたがそれは、ぼくらが彼らを侮蔑していて、ただ一刻も早く彼らの監禁から逃れねばならないと考えていたからである。「そんなことじゃあ、君は卒業できなくなるぞ」と言ったのは担任の安藤であり、「色気づきやがって……」と口走ったのは体育の犬丸だった。

背の低い四角い顔の校長が左右に頭をふって大股にやってくると安藤はバネ仕掛のように立ち上がって席を譲り、「いつも問題ばかりおこして申しわけありません」と言って頭をさげ、ぼくらが寝とまりして歩いたことをまるで犬の交尾のことのように話すのだが、そうして醜悪に語れば語るほど自分達が清潔であるような錯覚をおこすらしい。安藤はいかに彼がぼくと嘉奈子のことで奔走したかをうまいぐあいに校長に告げ、ひるがえってぼくらの方に強いレンズで拡大された眼をむけて、君たちのことでこの頃は夜もろくろく眠れないでいるんだと話すのだが、それをきくとぼくの背中はむずがゆくなってきて胸のあたりに火がまわりだして何かわあわあ喚きたく

なるのだ。「担任の先生がそれほど心配してくれているのに、お前は少しも改心する気がないのか」と校長は嗄れ声で言うのだが、なぜ彼の声はかすれているのか、それが酒のせいだということもぼくは知っている。十三間通りの春日酒店の信吉の話によれば三日に一度は酒やビールが校長室でひらかれる会議にはこばれているのだし、ここにいるこの教師達も生徒に売りつける参考書一冊から二割のリベートをピンハネしてその積みたてで旅行をやり芸者をあげ、酒を飲みながらぼくや嘉奈子や信吉ら非行少年の対策を話しあうのである。高校二年のぼくらのクラスの中には学校に出入りする業者の息子や親戚の者が幾人かいるし、彼らはそのリベートを調べて教師の裏面を暴露し権威をひきずりおろすことに熱情をかんじているのだが、ぼくにしても安藤がレンズの奥のガラスのような眼をうるませてぼくの将来を思って夜もろくろく眠れぬなどというのをきくとますます彼らがいやらしいと思わざるをえない。

嘉奈子の担任の頬骨のたかいオールドミスの山際さきは、嘉奈子をさとすように言った。

「あんた、このひとが将来あんたと夫婦になるつもりで、真面目につき合っていると思っているの？」

嘉奈子はすいと顔をあげて言った。

「私だって、このひとが真面目でないの知っているわよ。でもさ、先生、このひとハンサムだからいいじゃないの。先生も遊んでごらんよ、面白いから……」

「なにを言うか！」嘉奈子の頬がなり一瞬憤怒が教師達をとらえたかにみえたが、もともと彼らに怒りがあるわけがない。そんな高級な感情を維持するには彼らの精神は散漫でありすぎ、彼

らのそれは弱点を生徒に衝かれた教師の面子の混乱でしかない。ぼくらはまる二時間も彼らに囲まれて訓示され改心をせまられ、以後気をつけるという誓約をせまられ、それを拒否してふらふらになって釈放されたのだった。

真向かいから木枯らしの吹きつける校門の外にでながらぼくは毎度のことさと思ってみたが、セーラー服の脇のホックのはずれているのも気づかずに歩いている嘉奈子の横顔にはさすがに疲れがみえた。のほほんとしてチュウインガムを噛んではいるが、彼女がそうであればあるほど、ぼくは嘉奈子の内心の傷痕に触れてみたくなる。それでつい言ってしまう。

「もうあんな学校なんか行ってもしょうがないな。君もやめろよ」

すると嘉奈子はその眼に皮肉な光りをつけ頭髪を後ろになげるように仰向いて言うのだ。

「そういう言い方、ちと生意気ね。おかみさんあつかいは早すぎるわよ。それになんでしょ、卒業しなくちゃ、いいとこ就職できないでしょうが。あんたみたいなお坊ちゃんには分からない苦労が、こちらにはありますのよ」

こういう言い方にはぼくは馴れているのでぼくは笑ってみせるが、しかし、ひそかにぼくの胸を向こうにおしやる嘉奈子の冷たい手をその言葉の中にききとることができる。

ぼくらは長い灰色のペンキ工場の塀のはずれに立って、夕陽がガスタンクに赤く反射するのを眺めてから無言で別れた。ぼくは嘉奈子の薄い肩のあたりを見おくりながら、今日の放課後のバイトを棒にふった彼女と彼女の弟の夕食がどんなものかと想像して、胸のしめつけられる思いがするのだった。

駅前のパン屋の店先に嘉奈子は店員の白い服を着て立って、ぼくが駅の階段をおりてくるのをいつものとらえようのない微笑をただよわせながらみている。ぼくは何くわぬ顔で近づき百円札をだして四十円のパンを下さいと言うと彼女は、はいどうもありがとうございましたと四十円のパンを袋にいれて百円銀貨四枚の釣をぼくの掌にいれる。ぼくはそれでタマゴとミカンを買って彼女の借りている部屋のある路地にはいっていく。ギブスをはめて低い天井をみている広志は、土色の唇をゆるめてぼくにほほえむ。姉のどことなく冷たい笑いとはちがう子供の素直な微笑だ。広志の夢はいつか力いっぱい野原をかけめぐることだが、それが生涯彼にはありえないことだといつかぼくは彼に話してきかせなくてはならない。それをぼくはまるで希望を語るように話せたらと思うのだが嘉奈子は一笑にふする。

「広志、今日は目玉焼か、それとも甘く焼こうか」

とぼくが言うと、姉に似て陰のある瞳が気弱に光ってどちらでもいいと言う。ぼくは目玉焼をつくってそれを彼の女の子のような形のいい唇におしこみながら、ぼくもパンをかじって昨日の詰将棋や昨夜のラジオの「帝国海軍の最期」について話しあうのだが、相撲の大鵬が負けたといって何日も口惜しがる彼に、ぼくは人間というものは敗れることに馴れなくてはいけないんだよ、と口を酸っぱくしていうのだ。そのうちに広志は疲れて瞳孔がとろんとしてしまい眼の縁が濃くしずんでくるので、ぼくは待ちくたびれたようにこの陽のささぬじめじめして冷たい部屋から外にとびだすのだが、そんな時だ、ぼくがこの姉弟にかかわりあっているのが少し忌々しくなるの

は。だが彼らとの関係をたちきることはぼくにはいつでも出来るのだと思いこむことでぼくはこの不安をはらいのける。広志はぼくのことを親切で勇敢なお兄さんと考えているらしいがぼくのこの忌々しさを知ったら、どんなに絶望するだろう。だが嘉奈子のぼくに対する態度がなにかぼくにもどかしさを与えるからといって、そのことでその弟に当たり散らすことはあの犬丸や安藤やセンセイたちのやることであって、ぼくのやることではない。ぼくは一年前まではくだらぬ思索の中で無限に堂々めぐりしていたが、今では直観的に感情に折り目をいれることが好きになってきている。

街角で草色のセーターと長いショールを首にまいた嘉奈子が信吉と話しているのを、ぼくは電話ボックスにもたれて眺めていた。信吉とどんな話があったにしても嘉奈子は目下のところぼくと寝ているのだし、それは確かなことの見分けがたい人間関係の中で、一つの判断のてがかりにはなるはずだ。ぼくはほんの少しじりじりしながら彼女を待ったがやがて嘉奈子は信吉から何かうけとって、こちらに向けて歩きだした。近づいてきた嘉奈子は熱があるのか頬を赤くし、黒く大きい眼がうるんだようにひかって、その鼻すじの冷たい線がときどきぼくに寄りつきがたい賛嘆の念を与える。けれどもぼくは彼女の胸がもう少し固くなるには肥えねばならないのだと考えている。

「金少し残ってない？」

ときくのでぼくはジャンパーのポケットの中に手をいれ、切れたボタンや鍵や文庫本の間をさぐって百円玉を一つとりだし、彼女の湿った掌にいれると彼女は睫をおとしてそれを見つめてい

る。ああこの恰好はさっきの信吉と嘉奈子のそれと同じだと気づいたものの、これで一食分はあると考えている彼女の眉の間の陰りをみるとぼくはまたも彼女のために金をつくる方法を考えてしまうのだが、それはそれほど困難なことではない。ぼくは陸橋を渡り貨車のぶつかりあう音響のきこえてくるN駅の上の墓地の石に坐って煙草をふかし、機関車区を眺めて日の暮れるのを待っている。遠くどこからかひきずられてきた貨車の列はそこでひとつずつ切りはなされてごろごろ走りそれぞれの方向別に分けられていく。その車にぶらさがって旗をふっている若い男はものも言わず飽きもしないでいつまでも同じことをくりかえしているのだが、そんな光景をみているとなんとなく心が落ちついてくるから不思議だ。やがてぼくはぼくらの学校の裏にまわり教室の窓をあけてはいりこみそこの壁のスピーカーを二つはずして帰ってくる。時々ぼくは街で繁盛している玩具屋みたいな新刊書店の棚から辞書やベストセラーを失敬してカバンにいれ、隣り街の古本屋へもっていくのだがつくろうと思えば金は簡単にできるのだった。それは雨がふれば濡れればいいさというようなものであるがそれをやる度に心におこる緊張はぼくをしてますます孤立させ、ぼくを強くし、ぼくの世間への侮蔑を深めることになる。ぼくは陸橋の上からプラットホームに降り立つサラリーマン達の疲れた顔や学校のセンセイ達のことを考えると、世界の果ての赤錆びた鉄骨ばかりの廃墟の街にひとりほうりだされた時のような頭痛と切迫した寂寥感に息がつまる思いがする。だから時にぼくに思いだしたように金をくれるK県では金融業者として評判のよくない父親も、E小学校PTA会長の母親もぼくのまさにぼくであるところのものを愛することができず、或いはせめて息子の中には親には理解できない見所があるのだと夢想する親馬鹿

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com